俳諧七部集

春乃日
冬の日
ひさこ

一

イ 4
3157
23(1)

14
3157
23
(1)

俳諧七部集

曙をんとん〱の戸扣きあひく
熱田のうさよ伸さね渡し舟さいし
くせわゆくは并松のくさを見てゐて
いとのうなる重五ねむれるをとるな
竹墻かとちろさよふらぬよかくる
のまりきを　斗母元　出仕家

二月十八日

春めくや人さまざまの伊勢まいり　荷兮
桜ちる中馬ながく連　重五
山かすむ月一時よ館立て　雨桐
鎧ながらの火にあたる也　李風
しら風によらく啼ハ鶉なく　昌圭
くもしはよ沖の岩つゑく見えて　執筆

ウ

須广寺に行の帷子脱かえん　重五
をれくかくる笛を戴く　荷兮
文王のはやしにけふも土はらて　李風
雨の牛打角のなまさ草　雨桐
肌ぬぎに一度ハ背をかく世なり　荷兮
傾城乳(チヽ)をかくす晨明　昌圭
貴きも讀に人の氣移て　雨桐
わたくしの神輿(ミコシ)うく里　重五

鳥居より半道奥の砂行く　昌圭
花に出男(ヲトナ)の帯蔦(タコ)わくれ共　李風
柳より隠れてらに鞠するや　重五
二
入かゝる日に蝶いそぐなり　荷兮
されはまた参らぐに家に車遣ゆく　李風
うち懐に梓(アヅサ)きるめれ　雨桐
黒髪をたゞめて物縫し　荷兮
いとましき五位の針立　昌圭

松の木に宮司が門はさしかゝく　雨桐
ちゞみし跡も見えぬ何者ぞ　重五
朝朗豆腐を鳶にとられけり　昌圭
念仏さへおもへば秋のあはれ也　李風
穂蓼生ふ蔵を住居に侘て　重五
子の名を揚の名よぶ月　荷兮
傘の細辺付ふかゝ雨の昏よ　李風
釣瓶かふく出家かゆく　雨桐

ウ

かゝみえぬ約なき八分よ渡し　荷兮
酒瓶ひとつを二人してつゝを　昌圭
在よりあまる局嫁子年よりて　雨桐
記念にとてし娵娵の菅畑　重五
いくたびと花と竹とにへだつなく　昌圭
弟も兄も鳥とられてゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁

おしろよりもむらくの鐘　野水

春流縁節供なるらん襟忌く　荷兮

口すゝぐべき清水ながれて　越人

松風もたそかれ經入の幽の破　羽笠

賣のうしろに出てある月　執筆

ウ

笠白き太秦(ウヅマサ)祭過にけり　野水

菊わけば垣よよひ子見えてとく　且藁

表町ゆづりて二人髪剃(カミソラ)ん　越人

暁いかに車ゆくらん　荷兮

鱈負て大津の浜に入にけり　且藁

何やらゆかし北国の声　越人

能衣わするゝ程と蚊やりして　羽笠

萩すゑたれん百日のくし　昌圭

二

里人に薄を貸ぬ妹の所　越人

月なき浪に重石(ヲモシ)をく橋　羽笠

ちうぢんが水の浪に乳の鮎　野水

汎そを春淡湯の山　且藁

のりもしや絵紫の袂伊勢参　越人

旧侍のえしは代々眉の圖　荷兮

物おもふ人軍の中は行わきよ　羽笠

名もかち栗とちぐく上け　野水

大年を念仏となふる麦酒棚　且藁
まゐらせし無盡よしんの隠や　越人
引ちぬれば菜のはな枸杞の人　荷兮
こもれよ廿日とやら参の影　羽笠
一ちりの宿を馬にて寺みれや　野水
こゝ魂もつるゝこゝろきの月　且藁
陽炎（カゲロウ）のもしのかゝる丈帰て　越人
喜雨袖かりし哥いそく　荷兮

ウ
田とかくむしの黒よしける　羽笠
力の筋をほどし中の子　野水
漣（サザナミ）や三井の寺る九鐘よりす　且藁
るびくのとかゝ雪の山く　越人
入つまとら廿九日の月さむき　荷兮
天のはしよりめり氷とけ　羽笠

三月十六日旦藁が田家に
とゞまりて

蛙のみきゝてゆゝしき寝覚かな　野水

額にあたるはらゝ雨のつら　旦藁

蕨烹る岩木の臭き宿かりて　越人

まじ〱人をとがむる馬の子　荷兮

立くのに渡しの舟の月見り　冬文

芦の穂を摺る傘の端　執筆

ウ

磯ぎはゞ施餓鬼の僧の集りて　旦藁

岩のあひより蔵たつる里　野水

雨の日も瓶焼やらん煙たつ　荷兮

ひだるきことも旅の一つ也　越人

寺よりも坊主ハ住まじ捉かけて　野水

解てやとらん杖むすぶ松　冬文

今宵ハ更くらしてやうしき

月十九日　荷兮室にて

咲まぜの菊にハ朽しき白露ぞ　越人

秋の和歌よみし頃　旦藁

初と虎色よりけり火を打ぬ　冬文

別の月になかうとりを　荷兮

結ふ花四の宮よりハ唐輪まで　旦藁

まりゆく道のをも山さかり　野水

永き日やゝ鈎と何ゝ忘れ　荷兮

二

簀の子　筆とらる五月雨の中　越人

紹鷗が瓢(フクベ)をかりて茶八分く　四水
連哥のもじにあるはづかし　冬文
瀧登り紫押まかて音こそん　趣人
岩苔しらの竃にさがりしも　且葉
むきかりは帛(キヌ)をてあり去の中る　冬文
莚二枚もむろさ家慧　趣人
朝毎の露あされさし下参他ん　且葉
暮うちを送るきねく月　四水

浮のなき嫁の日毎に綱入よ　菅子
る羽の漂おやどらぬひし　冬文
ウ
あらし山ぬざらね飛ぶ風ふくるなる　四水
作らく一的章の名もかし　萱亭
ふもの子水没に查起く　趣人
餅を喰はくい上君り代　且葉
山ゐ花所のありなり故でに　冬文
もしほ汲てしまぎ雀のかや　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

越人

山吹のあぢなき姐のもじでさへ　越人

蝶水のみにおりて来る　舟泉

きさらぎや餅酒も尽き雪おりて　聴雪

行幸のくるゝ洗ふ玉器　螽髭

朔日を鷹ミ川鍛冶のいそがしく　荷兮

月なき空の門はやくあけ　執筆

春

昌陸の松とは尽ぬ御代の春　利重

元日の木の間の競馬足ゆるし　重五

初春の遠里牛のなき日かな　昌圭

かくれなき海をかざれる麥畠　雨桐

門され若菜園の雪さむし　舟泉

鯉の音水ほの闇く梅白し　羽笠

舟〳〵の小松に雪の残りけり　昌碧

曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜国

繻てらし炊元日里の睡りかな　犀夕

星さくらかきまぜぬ人の男色　香霞

夕されも小柴負ふたる牛の夢　聴雪

朝日二分柳の動く匂ひかな　荷兮

之ゆく〳〵鳥の末ひくき霞かな　同

芹摘とてこけて泥なき雫かな　旦藁

のどまさる人の絆へ流しけり

みかへれば白壁いやし夕がすみ　越人

古池や蛙飛こむ水のおと　芭蕉

傘張の睡り胡蝶のやどりかな　重五

山や花墻根〳〵の酒ばやし　亀洞

花にうづもれて夢より直に死んかな　越人

春野吟

足跡に桜を曲る庵二つ　杜国

榛寺かくれぬものはさくらかな　当几

榎木まで桜の遅きながめかな　荷兮

餞別

藤の花たゞうつむひて別哉　越人

山畑の茶つみぞかざす夕日かな　重五

蚊ひとつに寝られぬ夜半ぞ春の暮　同

夏

ほとゝぎすまれその山鳥の尾ハ長し　九白

郭公さゆのみ焼てぬる夜哉　李下

かつこ鳥板屋の背戸の一里塚　越人

うきもしさゞ菜かられ梢の百合　杜國

わか竹のうらふみたるゝ雀かな　亀洞

傘をさゝまで蛍とぶ夜哉　舟泉

武蔵坊をとふらふ

さじつかやちゝゆく窓の夜川　高露

冬夜の東を望みゆかれゆく

鳥くちかくれうらうら夜の月　聴雪

老聃曰知足之足常足

てうひは離氷あつかふ薬哉　越人

篝火の微雨にほそて鳴蚊かな　柳雨

はしまれるなまむふ中に昏から　盧文

萱草ハ随分あつき花の色　荷兮

蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　仝

暁の夜後茶屋が扉遅きかな　昌圭

夏川の音に宿かる木曽路哉　重五

譬喩品三界無安猶如火宅

といふ心を

六月の汗ぬぐひ居る臺かな　越人

秋

背戸の畑なすび黄ばみてきりぎりす　旦藁

貧家の玉祭

玉まつる柱にむかふ夕かな　越人

しまくまて一度入る夜ぐれ　雨桐

雲おり〱人をやすむる月見かな　芭蕉

山寺の米はしかとの月見哉　越人

見つ家も雨も秋の月　雪水

八嶋をハかきたる屏風の絵とて

具足着て顔のみ多し月今宵　仝

待恋

きぬ〱を衣乗るしらんかなさん　荷兮

閑居増恋

秋ひとり琴柱はづれて寝ぬ夜かな　荷兮

釣かねもまた一つんによなかり　舟泉

冬

馬ハぬれ牛ハ夕日の村しくれ　杜国

芭蕉翁を宿し侍りて

霜さむき旅寝に蚊屋を着せ申　大垣住 如行

雪のそし竹馬の子の好みけん　昌碧

馬をさへながむる雪のあしたかな　芭蕉

行燈の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

この比の氷ふみわる名残かな　杜国

隠士にかりなる室をまうけて

あたらしき茶袋ひとつ冬籠　荷兮

貞享三丙寅年仲秋下浣

笠は長途の雨にほころび紙衣は
とまり〳〵のあらしにもめたり
侘つくしたるわび人我さへあはれに
おぼえける昔狂哥の才士此
國にたどりし事を不図おもひ
出て申侍る

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉
たそやとばしるかさの山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜國
日のちり〳〵に野に米を刈　正平

わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髪はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすごすごとなく　荷兮
影法(カゲボウ)のあかつきさむく火を焼て　芭蕉
あるじはひんにたえし虚家(カライエ)　杜国
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんばか　野水

たそがれを横にながむる月ほそし　杜国
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衛の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透顔おぼろなる　重五
いまぞ恨の矢をはなつ声　荷兮
ぬす人の記念の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜国

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮

冬がれわけてひとり唐苣　野水

しらじらと砕けしは人の骨か何　杜国

烏賊はゑびすの國のうらかた　重五

あはれさの謎にもとけし郭公　野水

秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉

日東の李白が坊に月を見て　重五

巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉

箕に鮗の魚をいたゞき　杜国

わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮

けふはいもとのまゆかきにゆき　野水

綾ひとへ居湯(ヲリユ)に志賀の花漉て　杜国

廊下は藤のかげつたふ也　重五

おもへども壮年
　いまだころもを振はず
はつ雪のことしも袴きてかへる　埜水
霜にまだ見る蕣の食　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
麻呂の月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞徳の富　正平

雨こゆる浅香の田螺ほりうへて　杜國
奥のきさらぎを只なきになく　野水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
縁さまたげの恨みのこりし　正平
口おしと瘤をちぎる力なき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五
小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遅かれ牡丹ぬす人　杜國

縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつこつとのみ地蔵切町　荷兮
初はなの世とや嫁のいかめしく　杜國
かぶろいくらの春ぞかはらぬ　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　正平
うぐひす起よ紙燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせきびと　重五

ゑすゝろ哭泣て打ける碁をとゞむ　芭蕉

孫さやんくのおして七十　杜國

拳ゝかめ次の常さはらぬあれ　重五

ひとつの傘(カサ)の下挙(コツ)りさし　荷兮

蓮池に鷺の子遊ぶ夕まぐれ　杜國

まどに手づから薄(ウス)様(ヤウ)をすく　野水

月にたてる唐輪の髪の赤枯て　荷兮

恋せぬきぬた臨済をまつ　羽笠

秋蟬の虚(カラ)に声きくしづかさは　野水

藤の實つたふ雫ほつちり　重五

袂より硯をひらき山のかげにて　芭蕉

ひとりは典侍(スケ)の局か内侍か　杜國

三ケの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五

しらぬのいさむ越の獨活刈　荷兮

つえながく事僕しく　中歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　杜國

こほりふみ行水のいなづま　重五

歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水

北の御門をおしあけのはる　芭蕉

馬糞掻(カク)あふぎに風の打かすみ　荷兮

茶の湯者おしむ野べの蒲公英(タンホヽ)　正平

らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
燈籠ふたつになさけくらぶる　杜国
つゆ萩のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麦さへ青し滋(シ)賀楽(カラキ)の坊　野水
朝月夜双六うちの旅ねして　杜国
紅花買(カウ)みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五
まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解(ホト)きけり　芭蕉
縣ふるはな見次郎と仰がれて　重五
五形(ゲンゲ)菫の畠六反　杜国
うれしげに囀る雲雀ちりちりと　芭蕉
真昼の馬のねぶたがほ也　野水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜国
庄屋のまつをよみて送りぬ　荷兮

捨し子は柴苅長(タケ)にのびつらん　野水
晦日(ミソカ)をさむく刀賣る年　重五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　芭蕉
あだ人と樽を枕に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禅　杜国
三ヶ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉
秋湖かすかに琴かへす者　野水

烹る事をゆるしてはぜを放ける　杜国
聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
かげうすき行燈けしに起侘て　野水
おもひの川を夜るの帯引　重五
こがれ飛たましゐ花のかげに入　荷兮
その望の日を我もおなじく　芭蕉

なに波津にあし火焼家をもて
ちくゑをまくれも

炭売のをのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花棘馬骨の霜に咲かへり　杜國
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振する　羽笠

賀茂川や胡磨千代祭り微近く　荷兮
いはくらの聟なつかしのつま　重五
おもふこと布搗哥にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平　杜国
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見む　芭蕉
門守の翁に紙子かりて寝る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮

霧下りて本郷の鐘七つきく　杜国
ふゆまつ納豆たたくなるべし　野水
はなに泣く桜の黴とすてにける　芭蕉
僧ものいはず款冬を呑　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鋳る　重五
八十年を三つ見る童母もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜国

西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに〆木うつ音　芭蕉
賤が家に賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり来て撫子かざる正月に　杜国
つゞみ手向る弁慶の宮　野水
寅の日の旦を鍛冶の急起て　芭蕉
雲かうばしき南京の地　羽笠

いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥くさき汐のさゝら水芹の根　重五
粥すゝる傲あのつま　花さかしこまりやまれ
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北の方なくなく簾おしやりて　羽笠
移りまぬ夢を青むる面　杜国

田家眺望

霜月や鸛(カウ)の彳々(ツク〳〵)ならびゐて　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉

樫檜山家の体を木の葉降　重五

ひきずるうしの塩こぼれつゝ　杜國

音もなき具足に月のうす〳〵と　羽笠

酌とる童(ワッパ)蘭切にいく　埜水

秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉

漸くはれて富士みゆる寺　荷兮

寂として椿の花の落る音　杜國

茶に糸遊をそむる風の香　重五

雉追に烏帽子の女五三十　野水

庭に木曽作るこひの薄衣　羽笠

なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮

麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉

江を近く獨楽菴と世を捨て　重五

我月出よ身をしのぶべき　杜國

寒き夜の窓ふり落葉を掃　羽笠

篭輿ゆるす木瓜の山あい　野水

骨を見て坐（ソロ）に泪ぐみうちかへり　芭蕉

乞食の簑をもらふしのゝめ　荷兮

泥のうへに尾をひく鯉を拾ひ得て　杜國

御幸に進むあたらしみはし　重五

こそにてる年は小角豆の花もろし　野水
萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮は實　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水

元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　荷兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪はきをよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　羽笠

追加

はつしくれよ近江蔵雨しとり霰　羽笠
橋やりあふみの松　從亭
ころも刈下刈に蛍をちやらして　重五
檜笠くる文蔵屋川も船着　杜国
朝し蛤かりし月毛海　芭蕉
ひよりに橋をもとの岐阜山　埜水

江南者琢磨家にひさこを送て是これは
是ぞ勝をまたりて酒を命なむ器なる
あるは武者大樽に造りて江湖をわたる
礼やいつる物入器よも異なり五十なる
後なん恵子のいして用なことを細しら
にとゝくれぬれともひそ瓢てあや
まりてはうちに臨る醒てさるに
日月陽秋さゝらくこの御して雪みあけ

和乃國なる郭公もいつれたるとも聞く
なるを古部人ともみえさるなりて皆風雅
乃藻思をいつまてかは是いつれなる
やまとのみにして　乾坤の外なることを出て
枝のことを云て毎日片内よれとうの

元禄三六月

越智
越人

花見

木のもとに汁も鱠も桜かな　翁
西日のどかによき天気なり　珍碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘（ヒキハダ）　翁
月待て仮の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣かはやわさ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　翁

名はさま〴〵に降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　翁

いふ事を唯一方へ落しけり　碩

ほそき筋より恋つのりつゝ　水

物おもふ身にもの喰へとせつかれて　翁

月見る顔の袖おもき露　碩

秋風の舟をこはがる波の音　水

雁ゆくかたや白子若松　翁

千部読花の盛の一身田　碩

巡礼死ぬる道のかげろふ　水

何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁

文書ほどの力さへなき　碩

羅に日をいとはるゝ御かたち　水

熊野みたきと泣給ひけり　翁

手束弓紀の関守か頑に　碩
酒ではけたるあたま成覧　水
双六の目をのそくまて暮かゝり　翁
假の持佛にむかふ念仏　碩
中〳〵に土間に居れは蚤もなし　水
我名ハ里のなふりもの也　翁
憎れていらぬ躍の肝を煎　碩
月夜〳〵に明渡る月　水

花薄あまりまねけはうら枯て　翁
唯四方なる草庵の露　碩
一貫の銭むつかしと返しけり　水
醫者のくすりハ飲ぬ分別　翁
花咲けり芳野あたりを欠廻　水
虻にさゝるゝ春の山中　碩

翁　十二
珍碩　十二

曲水十三

珎碩

いろ〳〵の名もむつかしや春の草　翁

うたれて蝶の夢はさめぬる　路通

蝙蝠乃のどかにつらをさし出て　仝

駕籠乃とをらぬ峠越たり　碩

紫蘇の実をかますに入る夕ま暮　仝

親子ならびて月に物くふ

秋のくさ宮もりかへの色あひに　通
こぼされていかうに侍　仝
はつり香乃羽織を肩にひきかけ　碩
小六うたひし市なかかつらは　仝
饒舌乃ちいさく見ゆる川の端　通
念佛申て杖のむくつけき　仝
こしらえし菜ももられて年の暮　碩
店賑く里乃女にわすれされ　仝

嫁娶孫さへ人乃媼つれて　通
花まてあつめよ月は勝れ　仝
ありのさす深の下を和泉なり　碩
生鯛あかつる浦たのすさみ　仝
しれ村の庄屋に醫者ちりむかなかれ　荷兮
挨拶ありんをけんをのまれとよ　越
かちうきる妻絞退屈も甚しき　兮
まうさ法もなす酒乃功ゆへに　人

なゝめなる秋の夕に歩ひろき　兮

蕎麦まだ白し山中胴中　人

うゐんゐの里乃もつれの月見哉　兮

もとこゝもつゝ子のこゝか裸也　人

めんつゝしむかの白亭迄と立ちまゐ　兮

文殊の智恵も槃特の愚癡　人

あれ〳〵蔵みやこ牽来ひし味噌　兮

何となきぬよ落る朝棚　人

志乃ふ夜の枕つうかりて笑〳〵　兮

あまつふとんも顔をつゝぬ子して　仝

汗の香をかくえく衣と水に流し　人

志つまりれ雨も乞ちあれこる　仝

花にはつゝ又百人まゐ胴まよ　兮

すゑい猿とも枕もなきる猿　仝

跡花九

花一

路通八
荷兮十
越人八

城下

鉄炮の遠音に曇る卯月哉　野径
砂の小麦の痩てはら〳〵　里東
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なまぬる一川餬ひに出る　乙州
暮いそぐ二人志かれる又猿よ　怒誰
秋の夜番物もらう声の哀　珎碩

無路花ん人の細手にむかへられて　筆

国の中むかし見し寒かゝる　野径

なふも又川原御をもく覚へ　里東

瀬乃ぬのしき生つきしや　泥土

馬子の非を厳をとゞやめて　乙州

一里と辨を山乃下荊　怒誰

見ん気きて寺屋に庭も掃除を　泥土

折れ花ハ消兩ゆしくれを　里東

雪舟は杳越の柩安几宮さん　野径

壱歩つにつあく千石たん銭　乙州

月花は三度産とよんで言ぬらせ　珎碩

老芭蕉乃垣たゝかうを卑厳　怒誰

くらまよしも報ぎすれす　里東

字乱る道錺始を豆めす　珎碩

乃みたける居酒の葦の一縲（サウキ）　乙州

古さたくちかのさる獵倉　野径

時しまで百姓まても烏帽子きて　怒誰
醍醐を見る心供御乃蛤　泥土
名もしらぬ道ハ船出来せん位やん　珠碩
連も力もし皆唐作なり　里東
かゝ風乃大毘寺縄手吹通　野径
蟲乃こゑするに用叶へてさ　乙州
棚剛き一夜泊まりハさぎか浅渡　泥土
名迎まつる月に菜食鬼もす　怒誰

肴経乃嗽に油さへて喉気なり　里東
四十まで老なからへるさ際　珠碩
髪そ世に枕乃語を護申して　乙州
酔を細なかにあかりて吹ゐる　野径
牧村乃花は菜の葉に乗る宿　怒誰
田なか片隅み苗乃かゝりさし　泥土

野径　六
里東　六

泥土　六
乙州　六
怒誰　六
珎碩　五
筆　一

雜

亀乃甲烹らるゝ時ハ鳴もせて　乙州
唯牛蚤の風乃ふく音　珎碩
百姓乃木綿仕まへバ冬のきて　里東
小哥そろゆるからうすの縄　探志
獨寐つく奥乃間ひろき旅の宿　昌房
蝙蝠飛てきゆる灯蝋　正秀

秋萩乃御前にちりかゝる塔之流　及肩
風ふけば城乃志らゝ哉なり　野径
鴬乃まだきこゑしる一傷つ　二嘯
雪乃やうなるかますくの塵　乙州
初花に雛の少将居なへへ　珍碩
んのそこにゑてあるまじき　里東
吃篭乃香に吹てこぼしし猫の役　探志
寝ても起ても常に鳥篇　昌房

秋入乃巾着でく月より　正秀
まつ上京をみゆるやさむ　及肩
蓋(カサ)に盃島羽の町屋乃今年ぞ　野径
雀を捕に　篭乃おぼく吹きさ　二嘯
うすゝ見る日和んみまと雨細く　乙州
添ひなき蛙声のもゝのぬれ　珍碩
深て夏の本綿給の袷ゝ　里東
擬れまれく寒きあけぼの　探志

暗かりよ菜摘乃下をこと付　昌房

猪子を呼るこゑよわり口　正秀

いそかしき程一節に狭紀　及肩

手汲かゆる鯉棚乃秋　野径

はらく吹し切鉢の残る風吹て　二嘯

まかな乃房もみのくの波月　乙州

吟曲に味のつくし提婦川邑　珎碩

稼挿しもちへ次に存く物る　里東

月をめぐりて毛のくれにへなあけて　探志

こゝろをかくさき宿れ上侍　昌房

舟三りふ手栽稲をて緑に流け　正秀

縄をゆする寺せん上荻　及肩

花乃比花の日待よ花ぐらみて　野径

さくらよ稲田獅子のさん風　二嘯

乙州　四

珎碩　仝

里東　四
探志　仝
昌房　仝
正秀　仝
及肩　仝
野径　仝
二嘯　仝

田野

畴道や苗代時乃角大師　正秀
明れバ霞む野鼠乃顔　珍碩
觜ぶとのわやくに鳴し春の空　仝
かゝのゑたのしき門に乃文字　秀
月影よ利休乃家を鼻くの翁　仝
度〱芋をもらひそうけりかの　碩

虫た皆つて禱しく鳴やらむ　秀
拵足しの木履よろめる　碩
誓文を百も重ねて書る口の須子　秀
なつかしくもなり侍乃侍　碩
須广ハまて杣ふ自由なる臺所　秀
抓乃落る弓かつまきやる　碩
月氷る師走の夜の銀河　秀
無理ふ飛くる勝も進まれ　碩

いつめかねて大脇指をさゝれて　秀
獨ある子も誘(チヤ)鶏(ホ)ま物乃乳　碩
江戸酒を花咲殿に忘しみ　秀
あい乃山弾まつ乃入道　仝
雲雀帰里を厩(ヘヤ)巣(ココ)なき宿し　碩
火を吹くてある禅門の祖父　秀
本堂ハまさ荒壁乃ゆかしら絶　碩
羅漢頭殺まかせ給ひぬ　秀

歯を痛人乃顔き絵にかく　碩

之浦にあらむすこし渡より　秀

藤垣乃窓に紙燭を挟きき　碩

口上果ぬ間にさすの時宜　秀

今あやしきに小判よみかくる筆務　碩

秋入細る肥後表の隈本　秀

残月経も終て尽る役者なし　碩

寸布子ひろふ衣紋やはり　秀

深山に形めく花咲らしけく　碩

呼あまたの花も猫も添ふ手　秀

名残小人町乃雨あかのり　碩

やしほの楓木の芽萌立　秀

藪花に雪路枕つる若あけり　碩

水野まへよる場にもゆるの塗りよ　秀

正秀　十九

珎碩　十七